

# 「保育」の認識過程に関する研究

(その社会学的方法試論)

— 短大保育科学生を対象として —

民 秋 言  
小 林 捷 哉

- I 研究の目的と方法
- II 予備調査の結果と分析
- III 今後の課題

## I 研究の目的と方法

### 1. はじめに

短期大学保育科学生が二ヶ年の保育者養成課程<sup>1)</sup>での学習で、「保育」をどのように認識<sup>2)</sup>(Erkenntnis)していくか、その認識する内容と認識していく過程を明らかにしようとするのが本研究の課題である。本報告は、その社会学的方法試論を示したものである。

この「保育」についての認識は、大学での講義やゼミナール、教育・保育実習だけでなく学内外におけるさまざまな活動や経験を通じて得られるものであるし、また過去の多岐にわたる体験もそのためには大きく作用するであろう。そのほか至るところにその「認識」の機会はあるが、保育者養成にたずさわらわれわれにとっては、より直接的に学生と関わる講義やゼミナール、実習といった学内での教育・所定の課程の教育が、学生たちの「保育」認識にどのように資するかを明らかにすることは緊要の課題である。よりよき保育者を養成するためには、よりよき「保育」認識<sup>3)</sup>が得られることが望まれる。そこではわれわれはよりよきカリキュラム(教育課程)を編成する責を負っている。このカリキュラムを考えるばあい、学生がどのような内容の「保育」認識を、どのような過程で得ていくかを、その実態として把握しておくことは重要であると思われ、そのいみでも本研究の役割・課題は大きいといえよう。

さて、われわれは本稿で「保育」という語を、一般に用いられる、あるいはそれがもつすべての内容についてではなく、「職業としての保育」という意味に限定して用いることとする。したがって、「保育」の認識とは、職業人としての「保育者」についての認識ということである。さらに、「認識」なる語は、ある一定の概念の学習による内面化という意味で用いている。すなわち、本研究は、一定の概念規定された職業としての「保育」を、所定の学習課程でどう理解し認識していくか、その過程と内容について明らかにしようとするものである。

## 2. 職業としての「保育」

「保育」を職業として捉えるばあい、そこにはさまざまな視点があり議論がある。もっとも一般的な議論は、保育者は「聖職」か「労働者」かの対比による保育者論である。また保育者の専門職化の議論もさかんである。一方、保育者(職業人として)の資質についての議論は数多くあり、それぞれの立場からの主張がなされている。

われわれは、職業としての保育を考えるばあい、まず職業について簡単に概念を整理しておかねばならない。ここでは「もっとも標準的」とされる尾高邦雄の規定にしたがうことにしよう。

周知のように尾高は、職業を「個性の発揮、連帯の実現及び生計の維持を目指す・人間の継続的なる・行為様式である」と定義しているが、これには三つの内容が含まれている。それは、まず第一に一定の収入を得「衣食の資をうるための継続的な人間活動であること」、第二に人間は職業に従事することにより他人の生活や社会に貢献するという「社会的に期待される『職分』の遂行であること」、第三に人びとは現実には生活のためだけで職業に就いているとはかぎらない、したがって「個人の『天職』を自覚して行なう寄与の生活であること」、である。こうした、A. 経済的側面としての生計の維持、B. 社会的側面としての役割の実現(社会的分業への参加)、C. 個人的側面としての個性(個人的能力)の発揮の三つが職業を考えるとときの基本的要素となる。

以上は職業理解の一般的規定である。職業としての「保育」を考えるために、さらにわれわれは保育のもつ特殊性に注目しつぎのような枠を設定することとした。これを上述の尾高の規定とを対応させてみたのが図表1である。まず、その枠は、大きく個人的側面と社会的側面に分けられる。前者は個人的資質と子ども観とからなり、後者は「保育」への社会的評価である。はじめの個人的資質と子ども観は、先述の尾高の規定の(C)「個性の発揮」に対応するものである。個人的資質については、生まれながらにしてもち合わせている特性(i)属性(ascription) — 性や年齢、体力など — と、社会化の過程でその個人が習得していく(ii)業績(achievement) — 専門的な知識や技術、資格や免許など —、そして(iii)パーソナリティ(personality) — 情緒・情操、個性や協調性など — がその内容となる。とくに(i)属性と(ii)業績とは、従来はその有無や程度が保育職の当否に大きく作用してきたものである。つぎに(iii)子ども観であるが、これについては教育、経済、宗教、社会などさまざまな側面から検討されなければならないが、ここでは「子どもとの接触の視点」としてとくに子どもへの「愛情」や「好意」という点から考えてみることにする。

尾高の規定の(A)「生計の維持」は、社会的評価のうちの(iv)「待遇」 — 収入(経済的待遇) — に対応する。また、(C)「役割の実現」については、社会からどのように(v)「期待」されているか、その社会的使命や意義はどうか、そして職業のイメージとしてどう(vi)「印象」を社会に与えているか、といった内容を設けている。

以上、尾高の職業についての規定をもとに、保育を職業として捉える枠として、(i)属性、(ii)業績、(iii)パーソナリティ、(iv)子どもとの接触視点、(v)待遇、(vi)期待、(vii)印象(イメージ)の7項目を用意した。さらに、われわれは課題を明らかにするため、I「職業としての保育」、

図表 1・職業としての「保育」を捉える枠

職業の 三要素 「保育」を 把握する視点		A 経 済	B 社 会	C 個 人
		生計の維持	役割の実現 社会への貢献	個性の発揮・個人の能力
個 人	(イ) 属 性			性・年齢・体力
	(ロ) 業 績			知識・技術・免許・資格
	(ハ) パーソナリティ			情緒・情操・個性・協調性
	(ニ) 子ども観			子どもとの接触視点 （「好き」・愛情）
社 会	(ホ) 待 遇	経済的待遇(収入)		
	(ヘ) 期 待		社会的使命・意義	
	(ト) 印 象		職業のイメージ	

注：「職業の三要素」は、前掲尾高邦雄，松島静雄の論稿による

②「保育者であるための条件」，③「保育者としての適性の自己評価」の3つの方向から，この7項目を適宜組み合わせながら検討してみるとしたのである。その具体的内容はつぎに示すとおりである。

① 「職業」としての「保育」を捉える視点（枠組）

a 属性（アスクリプション）→(イ)

1. 女性にのみ適している
2. 現代の日本では女性により適している
3. 男性にも女性と同じように適している

b 業績（アチーブメント）→(ロ)

1. 専門的な知識や技術をより多く必要とする
2. それほどの専門的知識や技術を必要としない
3. やる気さえあれば専門的知識や技術は要求されない

c 子どもとの接触視点→(ニ)

1. 肉親に対すると同じような愛情を（保育する）子どもにもつ必要がある
2. 子どもが好きでなければつとまらない

3. 子どもが好きかどうかはあまり関係ない

d 社会的評価・経済的待遇→(ホ)

1. 他の職業に比べて過分の経済的待遇を受けている

2. 労働に見合った経済的待遇を受けている

3. 労働に比して経済的には十分に報われていない

d 社会的評価・意義, 使命→(ヘ)

1. 経済的にも報われ社会的使命も大きい

2. 経済的には報われないが社会的使命や期待は大きい

3. 経済的には報われているが社会的意義は小さい

d 社会的評価・印象→(ト)

1. はなやかで誰もがあこがれる

2. 外観ははなやかではあるが実態は地味である

3. 地味であり目立たない

② 「保育者」であるための条件を把える視点 (枠組)

a 属性→(イ)

1. 激しい労働に耐えうる体力・身体的条件

2. 女性であること (保育者は女性でなければならない) ・性的条件

3. できるだけ若いこと・年齢的条件

b 業績・知識や技術→(ロ)

1. 教育学や心理学その他の専門的知識の習得

2. 音楽や造形その他の専門的技術の習得

3. 社会的一般常識の習得

b 業績・資格や免許→(ハ)

1. 免許や資格は必要である

2. 免許や資格は必ずしも必要でない

3. 免許や資格は全く必要でない

c パーソナリティ→(ニ)

1. 安定した情緒や豊かな情操

2. 豊かな個性

3. 豊かな協調性

d 子どもとの接触視点→(ヒ)

1. 子どもをこよなく愛する心

2. 子どもを深く正しく理解しようとする態度

3. 子どもがただ好きという気持

③ 「保育者」としての適性の自己評価, その視点 (枠組)

- a 属性→(イ)
  - 1. 激しい労働に耐えうる体力をもっている (いない)
  - 2. 女性であるから (ないから)
  - 3. 若いから (若くないから)
- b 業績・知識や技術→(ロ)
  - 1. 専門的知識を習得している (いない)
  - 2. 専門的技術を習得している (いない)
  - 3. 社会的一般常識をもっている (いない)
- b 業績・免許や資格→(ロ)
  - 1. 免許や資格がとれる見込みあり (見込みない)
- c パーソナリティ→(ハ)
  - 1. 情緒が安定し情操が豊かである (情緒が安定せず情操も豊かでない)
  - 2. 個性が豊かである (豊かでない)
  - 3. 豊かな協調性がある (ない)
- d 子どもとの接触視点→(ニ)
  - 1. 子どもをこよなく愛する心をもっている (もっていない)
  - 2. 子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている (いない)
  - 3. 子どもがただ好きである (子どもが好きでない)

### 3. 認識の過程における実習の意味

さて、いままで述べてきた職業としての「保育」を、学生はどのような過程でその内容を内化＝認識していくのであろうか。冒頭にも触れたように、「保育」を認識する、すなわち「保育」について知識を得、理解を深めるのは、授業や実習によってだけでなく、その他学校内外のさまざまな場面でその機会をみつけているのである。

本稿では、その認識過程において、教育・保育実習（以下単に実習という<sup>9)</sup>）をもっとも重大なターニング・ポイントとして捉える。学内における教師から学生への直接的な働きかけ、講義やゼミナールも「保育」認識に大きな役割を果していることはいうまでもない。しかし、理論と実践を結び付けて考えることのできる機会であり、保育対象たる子どもや職業人としての保育者の働く生のすがたに触れる場として実習を位置づけるならば、それは職業としての「保育」に関する認識を得る（深める）ための絶好の、貴重な時点といえよう。そのいみで、実習は「保育」認識に衝撃的な場面を提供するはずである。したがってわれわれは、本研究では、各種の実習を「保育」認識のインパクトとして考えることにするのである。

### 4. 調査の方法

こうした過程を解明するために、われわれは本学保育科学生を対象として、つぎのような方法的枠組をもつ調査を企図した。

### 1) 調査の内容

学生によって認識される「保育」の内容，したがって「保育」の概念を明らかにする。これについては，すでに述べたような七つの視点(カテゴリー)を，①「職業」としての「保育」をどのように認識(理解)しているか，②この「保育」者に必要な条件は何か，③そうした条件を自分はどの程度備えているかといういわば保育者としての自己の適性評価，の三つの方向で検討する。これらの内容をもつ「保育」を，つぎに述べる各段階(時期)ごとにどう理解し認識していくか，その過程(変化)を把握することが課題である。

### 2) 調査の時期

この調査を実施する時期として，①入学時，②1年次前半期(見学実習終了時)，③1年次後半期(保育所実習終了時)，④2年次前半期(幼稚園実習終了時)，⑤2年次後半期(施設実習終了時)，⑥卒業後の一定の時期の6時点を設定した。(図表2はこの6時点と実習並びに授業科目などを照合したものである。)

①の入学時では，学生たちは保育を学ぶべく入学してきたが，保育についてはいわば白紙の状態ですべてを調査の出発点とする。②から⑤は，それぞれの実習を体験し「保育」についての理解や認識を得ていく時期である。(もちろん実習だけでなく授業が大きく影響していることはいうまでもない)。そしてさいごに，⑥卒業してから保育者としてある期間を経た時点，現実に保育に従事することによる「保育」認識の変化をみる。

### 3) 調査の技法

原則として質問紙による自計式調査法を採用する。

質問項目は，前出49～51頁に示したとおりである。すなわち，①職業としての「保育」の枠には六つの視点(カテゴリー)，②「保育者」の条件と，③「保育者」としての適性の自己評価にはそれぞれ五つの視点を設け，各視点ごとに種類や程度，レベルに応じた項目を用意した。これらを選択肢として，多答方式で①では六つ，②と③では各五つ以内選ばせる。これにより，各視点(カテゴリー)への偏りや分散，また同一視点内でもどの種類や程度，レベルへの集中・分散をみる。

### 4) 調査の対象

本学保育科に入学した学生(I部生)を対象とし，時系列的に，入学してから卒業するまで，さらに卒業後保育者として一定の経験をうる時点まで追跡的に調査する。

### 注

- 1) 本学の保育科は，昼間部(I部・女子のみ)は二ケ年，夜間部(II部・男女共学)は三ケ年の課程である。本研究の対象とする保育科学生とは，昼間部(二ケ年課程)の学生である。いずれも所定の単位を取得したものには，幼稚園教諭2級普通免許並びに保育資格が与えられる。
- 2) ここにいう「保育者」とは，幼稚園教諭や保育所保育士，さらにその他の児童福祉施設の保育士をさす。
- 3) これは筆者らの私見であるが，本学の現行のカリキュラムについては多くの問題を内蔵しており，根本的に検討する必要がある。とりわけ，二ケ年間にぎっしり詰まった授業数とそのほとんどが半年間2単位の講義，さらに各教科間の統合性の不足(欠如)など

図表 2 調査の時点と実習・教科目

調査時点①		②	③	④	⑤	⑥
学年・学期		1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	卒業 保育者
実習		幼保見学実習	保育所実習	幼稚園実習	施設実習	
教 科 目	一般教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文 学</li> <li>・音 楽</li> <li>・美 術</li> <li>・経 済 学</li> <li>・生 物 学</li> <li>・地 学</li> <li>・心 理 学</li> <li>・英 語 I</li> <li>・独 語</li> <li>・体 育 実 技</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・哲 学</li> <li>・社 会 学</li> <li>・化 学</li> <li>・英 語 I</li> <li>・法 学(日本国憲法を含む)</li> <li>・独 語</li> <li>・体 育 講 義</li> <li>・体 育 実 技</li> <li>・数 学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人 間</li> <li>・英 語 II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人 間</li> <li>・英 語 II</li> </ul>	
	教育・保育・福祉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教 育 原 理</li> <li>・児 童 教 育 概 論</li> <li>・社 会 福 祉 原 論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保 育 史</li> <li>・児 童 教 育 概 論</li> <li>・幼 児 教 育 論</li> <li>・児 童 福 祉</li> <li>・乳 児 保 育 論 II (前半)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳 児 保 育 論 I</li> <li>・児 童 福 祉</li> <li>・社 会 福 祉 方 法 論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社 会 福 祉 方 法 論</li> <li>・幼 稚 園 論</li> <li>・保 育 所 論</li> <li>・児 童 保 護 論</li> <li>・障 害 児 教 育 論</li> <li>・家 庭 管 理 論</li> </ul>	
	心理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発 達 心 理 学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教 育 心 理 学</li> <li>・発 達 心 理 学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教 育 心 理 学</li> <li>・臨 床 心 理 学</li> </ul>		
	保 健	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小 児 保 健 I</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小 児 保 健 I</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小 児 保 健 実 習</li> <li>・小 児 栄 養</li> <li>・精 神 衛 生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保 健 衛 生</li> <li>・小 児 保 健 実 習</li> <li>・小 児 栄 養 実 習</li> </ul>	
	保 育 内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自 然 実 習</li> <li>・声 楽</li> <li>・児 童 文 化</li> <li>・音 楽 リ ズ ム</li> <li>・楽 典</li> <li>・児 童 文 化 実 習</li> <li>・ピ ア ノ</li> <li>・図 画 工 作</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音 楽 リ ズ ム</li> <li>・図 画 工 作</li> <li>・ピ ア ノ</li> <li>・声 楽</li> <li>・楽 典</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自 然</li> <li>・ピ ア ノ</li> <li>・音 楽 リ ズ ム</li> <li>・絵 画 制 作</li> <li>・声 楽</li> <li>・体 育</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健 康</li> <li>・社 会</li> <li>・言 語</li> <li>・音 楽 リ ズ ム</li> <li>・ピ ア ノ</li> <li>・声 楽</li> <li>・児 童 文 化</li> </ul>	
	演 習 ・ 実 習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実 習 論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実 習 論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基 礎 科 目 ・ 保 育 内 容 演 習</li> <li>・実 習 論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基 礎 科 目 ・ 保 育 内 容 演 習</li> <li>・実 習 論</li> </ul>	

は緊急に解決しなければならない課題である。こうした状況は、ひとり本学のみならず、短大保育科には全般的に指摘されるものである。尚、とくに保母養成課程のカリキュラムについては、昭和54年度の保母養成セミナー(東京)の大きなテーマの一つであった。また、筆者(民秋)は「保育者養成課程の課題」・季刊『保育研究』創刊号、1980年4月、相川書房刊でこの点に若干言及している。

- 4) この問題については、泉五郎「保育者と職場」・森樹偏『保育原理』福村出版がよく論点の整理された論文である。
- 5) 荘司雅子、水野浩志「幼児教育の原理」・長田新企画『幼児教育学』御茶の水書房がよくまとまっている。
- 6) 八木正「職業と労働」(山根ほか編『テキストブック社会学(4)職業』有斐閣) 3頁
- 7) 尾高邦雄『職業社会学』岩波書店、22頁
- 8) 八木正「前掲書」3頁並びに、松島静雄「職業」・『教育社会学辞典』東洋館出版、579~580頁、を参考にした。
- 9) 幼稚園教諭2級普通免許状を取得するために幼稚園での教育実習、保母資格を取得するために保育所並びに保育所を除く児童福祉施設での保育実習がそれぞれ課せられている。

また、実習は一般的にはつぎの4段階に分けられる。(1)見学・観察 はじめて保育の現場を観、子どもたちの遊びや活動など保育の実態に直接に触れる。(2)参加実習 主として保育者の助手として活動し、保育の内容や指導方法について学習する。(3)部分実習 保育活動の一部分を受けもち子どもたちを指導する。(4)指導(担任)実習 一定期間子どもを担任し、計画を自分でたてて保育活動をする。ここで保育活動の全貌を体験する。(以上、久保田浩『保育活動ハンドブック』誠文堂新光社、55~56頁を参考にした。)本学では、第一段階として見学・観察をさせ、あとは全部を((2)・(3)・(4))まとめた実習を行なっている。

## II 予備調査の結果と分析

### 1 予備調査の目的と方法

予備調査はすでに述べた本研究の課題を達成するための準備として、方法的な妥当性を確かめるために実施した。すなわち、調査技法(調査対象の選定、調査項目の設定とワーディングなど)、調査時期と調査回数、分析枠組などについて検討することが目的となる。

予備調査はI部(昼間部)学生のみを対象にし、1年生については幼稚園・保育所見学実習終了後の昭和54年5月下旬に、2年生については6月の幼稚園実習終了後(保育所実習は1年次の3月に終了、児童福祉施設実習は2年次11月中旬に実施予定)に実施した。調査は1年生、2年生とも全学生(1年生が290名、2年生が305名)を対象にしたが、回収率は1年生が93.1%、2年生が56.7%である。なお、本調査では卒業後の追跡調査をするので、参考資料を得るために、在学生との比較検討をするために卒業生(9月に行なわれた学内における卒業生の集会に出席した卒業後3年目ないし5年目の者に協力依頼をした)29名につ



いて調査を実施した。在学生、卒業生ともにすべて女性が調査対象となっている。

調査票は1年生、2年生とも同じものを使用し、卒業生についてはフェースシート部分を割愛したものを用いた。

以下、予備調査の結果の紹介とその分析を(1)調査対象の基本的特性、(2)職業としての「保育」をとらえる視点、(3)保育者であるための条件をとらえる視点、(4)保育者としての適性の自己評価、の4部に分けてすすめていくことにする。

## 2 調査対象の基本的特性

基本的特性としては保育科への入学理由、免許・資格取得の希望、卒業後の進路をみる。

保育科への入学理由は表1にみられるように、1年生については「免許・資格をとり保育者として働く」というものが全体の80.7%、「子ども理解の知識や技術の習得」が全体の70.7%、「育児のための知識や技術の習得」が全体の48.9%となっている。その他の理由をあげた者の比率はきわめて低く、以上の3つの理由が高い比率であげられている。保育科入学理由の主たるものは保育者として働くために免許・資格を取得するためにあるといってもよい。このことは卒業後の進路にも当然かかわってくることである。

表1 保育科への入学理由

		子ども理解の知識や技術の習得	育児のための知識や技術の習得	免許・資格をとり保育者として働く	将来に備えて免許・資格をとる	第1志望校に入らなかった	ただ何となく入学した	その他
1年生	実数	191	132	218	18	15	6	12
	%	70.7	48.9	80.7	6.7	5.6	2.2	4.4
2年生	実数	134	98	156	6	7	2	8
	%	77.5	56.6	90.2	3.5	4.0	1.2	4.6

注 (%)は総数(1年生・270, 2年生・173)中に占める割合である。

なお、2年生については参考にとどめる。

免許・資格取得の希望については表2にみられるように、ほとんどの学生が幼稚園教員免許と保育士資格の両方の取得を希望している。

卒業後の進路については、表3に示すように保育者として働くという者が1年生では87.4%、2年生では95.4%ときわめて高い比率となっている。保育者として働くかどうかまだわからないという未定の者が1年生で10.4%、2年生で1.2%いる。保育者として働かないという者は1年生で1.1%、2年生で2.9%となっている。

卒業後の進路は入学理由でもあきらかなように保育者として働くことが大部分の学生に予定されているところではあるが、1年生と2年生とでは意識に差があり、1年次の当初では全体の1割の学生が未決定であるが、2年次になって就職のことが現実問題になるにあたって未定者はきわめてわずかとなり、保育者として働くという意識が固まってきているといえよう。

表 2 免許・資格取得の希望

		幼稚園教 員免許の み	保育資格 のみ	幼免・保 資両方	免許・資 格はいら ない	未 定	計
1 年生	実数	4	0	265	0	1	270
	%	1.5	—	98.1	—	0.4	100.0
2 年生	実数	0	0	171	2	0	173
	%	—	—	98.8	1.2	—	100.0

保育者として働くことを希望する者はどのような保育職場を望んでいるのであろうか。表 4 によりみていくと、1 年生では幼稚園を希望する者が30.9%、保育所を希望する者が25.8%、施設を希望するものが3.0%となっており、具体的に希望先をあげているのは59.7%で全体のちょうど%となる。1/2以上の35.6%の者はまだわからないとしている。これにたいして2 年生では幼稚園を希望する者が48.5%、保育所を希望する者が39.4%、施設を希望する者が1.2%となっている。全体の%は希望先がはっきりとしているが、それでもなお、未定者がいたり、さらに1 年生よりも就職先を考えていない者の比率が高くなっていることにも留意したい。

就職希望は1 年生、2 年生ともに幼稚園が第1位であり、保育所がそれに続き、施設はきわめてわずかである。1 年生のときに未定であったのが、2 年生ではそれが減少し、幼稚園もしくは保育所と志望が明確化している。施設希望者は2 年生では1 年生の半数以下となっている。

表 3 卒業後の進路(1)——保育者として働くかどうか

		働 く	働かない	未 定	考えてい ない	NA	計
1 年生	実数	236	3	28	2	1	270
	%	87.4	1.1	10.4	0.7	0.4	100.0
2 年生	実数	165	5	2	0	1	173
	%	95.4	2.9	1.2	—	0.5	100.0

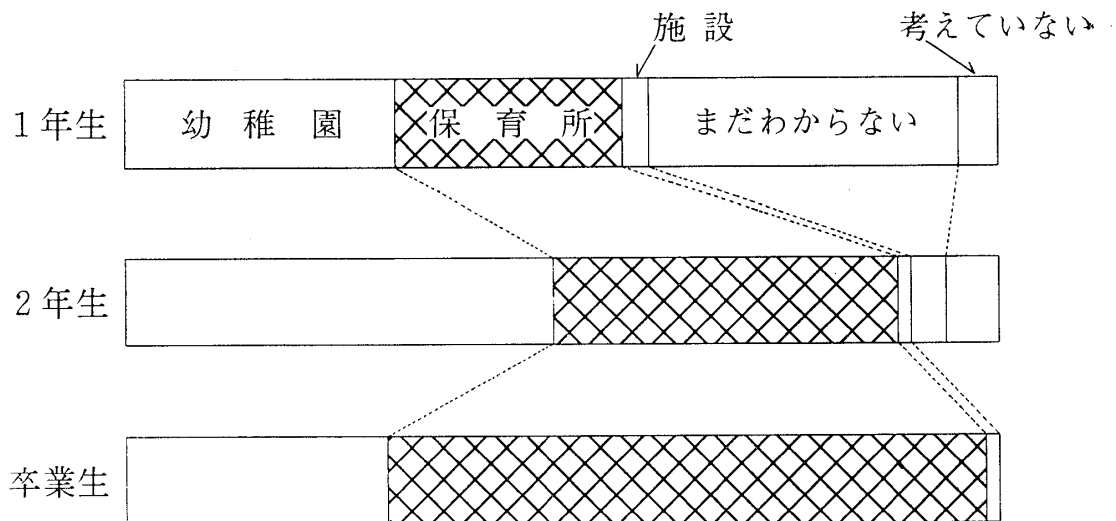
このような就職希望は現実にはどのように満たされているのであろうか。時系列を無視して比較してみると、図 1 に示すように保育職についての卒業生の就職先種別は保育所が68.4%、幼稚園が29.9%、施設が1.7%という構成比となっている。幼稚園を希望しながら幼稚園に就職できた者は推定で半数程度であろう。この点は時系列を追って追跡調査をすれば実態はあきらかになる。いずれにしても就職希望と就職の実態との間には大きな落差がみられ、設置主体、雇用条件、立地条件、採用試験などの諸要因がからみ希望どおりの職場を得られていないことがわかる。

表 4 卒業後の進路(2)——就業希望先種別

	1 年 生		2 年 生	
	実 数	%	実 数	%
幼 稚 園	73	30.9	80	48.5
保 育 所	61	25.8	65	39.4
施 設	7	3.0	2	1.2
まだわからない	84	35.6	6	3.6
考えていない	11	4.7	12	7.3
計	236	100.0	165	100.0

注：表3の「保育者として働く」と回答したものの就職希望先種別を分類した。

図 1 卒業後の進路——就職希望先種別



注：表4から作成

表5は就職希望先種別を設置主体別にみたものである。学生が就職を志望する際に考慮する条件の大きなものとして、公立か私立かという就職希望先の設置主体別があげられる。これは主要には雇用条件にかかわることが多いといえる。幼稚園の場合でみると、1年生では公立志望が42.5%、私立志望が19.2%、どちらでもよいが20.5%、まだわからないが17.8%となっているが、2年生になると公私立の比は逆転し、そしてまだわからないがなくなり私立が56.3%と過半数を超え、公立は27.5%となる。就職の実態からみると公立へ就職したものはわずか4.3%でありほとんど大部分は私立となっている。保育所の場合は、1年生では公立が60.7%、私立が3.3%、どちらでもよいが14.8%、まだわからないが19.7%となっており、それが2年生になると公立志望の比率がより高まり全体の $\frac{3}{4}$ を超える76.9%となり、私立志望は若干の増加にとどまっている。就職の実態からみると私立60%、公立40%の

表 5 卒業生の進路(3)——就職希望先種別×設置主体別×学年別

		1 年 生		2 年 生		卒業生(昭和54年 3月卒)	
		実 数	%	実 数	%	実 数	%
幼稚園	公 立	31	42.5	22	27.5	3	4.3
	私 立	14	19.2	45	56.3	67	95.7
	どちらでもよい	15	20.5	13	16.2	/	/
	まだわからない	13	17.8	0	—	/	/
	NA	0	—	0	—	/	/
	計	73	100.0	80	100.0	70	100.0
保育所	公 立	37	60.7	50	76.9	64	40.0
	私 立	2	3.3	3	4.6	96	60.0
	どちらでもよい	9	14.8	10	15.4	/	/
	まだわからない	12	19.7	2	3.1	/	/
	NA	1	1.5	0	—	/	/
	計	61	100.0	65	100.0	160	100.0
施設	公 立	3	42.9	1	50.0	2	50.0
	私 立	0	—	0	—	2	50.0
	どちらでもよい	2	28.5	1	50.0	/	/
	まだわからない	1	14.3	0	—	/	/
	NA	1	14.3	0	—	/	/
	計	7	100.0	2	100.0	4	100.0

割合となっている。施設の場合は対象者がわずかであるので多くのことはいえない。

基礎的事項の最後に、保育者として働く場合の職業の継続の見とおしについてみる。学年別では表6にみられるように1年生の場合は「働いてみてから考える」者の比率が31.9%と最も高く、ついで「出産後一時やめて子どもが大きくなったら働く」が28.4%、「生涯の仕事として続けたい」が17.0%となっている。それが2年生になると「生涯の仕事として続けたい」が30.6%で第1位となり、「とにかく働いてみてそれから考える」が27.2%、「出産後一時やめて子どもが大きくなったらまた働きたい」が20.4%、「ほかに適当な仕事が見つかるまで続ける」が10.3%、「子どもが生まれるまで働きたい」が9.5%で続いている。「結婚するまで働きたい」は2.0%と少ない。学年の比較で注目されるのは「生涯の仕事として続けたい」とする者の比率が2年生になると増加していることである。それは公立志望者に強くあらわれている。

表 6 職業の継続の見とおし

	1 年 生					2 年 生			
	公立	私立	どちらで よい	DK NA	計	公立	私立	どちらも よい	計
生涯の仕事として続けたい	22.5	12.5	11.5	10.7	17.0	35.6	18.8	33.3	30.6
結婚するまで働きたい	4.2	—	—	14.3	5.0	—	6.3	—	2.0
子どもが生まれるまで働きたい	7.0	12.5	3.8	10.7	7.8	6.8	10.4	16.7	9.5
出産後一時やめて子どもが大きくなったら又働きたい	31.0	25.0	23.1	28.6	28.4	23.3	16.7	20.8	20.4
とにかく働いてみてそれから考える	25.4	37.5	50.6	28.6	31.9	24.7	33.3	25.0	27.2
ほかに適当な仕事(職業)が見つかるまで続ける	1.4	—	—	—	0.7	—	—	—	—
DK・NA	8.5	12.5	11.6	7.1	9.2	9.6	14.5	4.2	10.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

### 3. 職業としての「保育」をとらえる視点

職業としての「保育」をとらえる視点はすでに示したように属性、業績、子どもとの接触視点、社会的評価——社会的評価はさらに経済的待遇、意義・使命、印象の三つのカテゴリーに分かれる——の大きく分けて四つ、さらに細分化して六つのカテゴリーに分けて設定される。そして各カテゴリーに三ずつ種類や程度をあらわす選択項目が用意されている。そこで、以下において保育を学ぶ学生やすでに現職に就いている保育者の職業としての「保育」をとらえる視点がどこにおかれているかをみていくことにする。

表7は18項目のなかから6項目を選択する多答方式で得られた結果を、18項目のそれぞれを視点としてとりあげた者の数の全調査対象者(学年別)にたいする百分比を示したものである。学年別に比率の高い上位六つまでの項目をあげてみると、1年生では①c2—子どもが好きでなければつとまらない(87.0%)、②c1—肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある(73.7%)、③b1—専門的知識や技術をより多く必要とする(63.7%)、④d'2—経済的には報われないが、社会的使命や期待は大きい(54.8%)、⑤a3—男性にも女性と同じように適している(48.5%)、⑥d3—労働に比して経済的には十分に報われていない(39.6%)となっている、2年生では、1年生と同じカテゴリーで選択されているので記号のみで順位を示してみると、①b1(85.5%)、②c2(85.0%)、③c1(79.8%)、④d'2(54.3%)、⑤d3(53.2%)、⑥a3(45.1%)となっている。現職の場合も同様にして順位を示すと、①b1(82.8%)、①c2(82.8%)、③c1(69.0%)、④a3(58.6%)、④d'2(58.6%)、⑥d3(51.7%)となっている。

以上の結果を比率の高い枠組の順で表にまとめてみるとつぎのようになる。

表 7 職業としての「保育」の把握(1)——学年別

枠組	番号	項目	1年(N=270)		2年(N=173)		現職(N=29)		
			実数	%	実数	%	実数	%	
属性	a 1	女性にのみ適している	0	—	1	0.6	1	3.4	
	a 2	現代の日本では女性に適している	7	2.6	26	15.0	3	10.3	
	a 3	男性にも女性と同じように適している	131	47.5	78	45.1	17	58.6	
業績	b 1	専門的知識や技術をより多く必要とする	172	63.7	148	85.5	24	82.8	
	b 2	それほどの専門的知識や技術を必要としない	11	4.1	1	0.6	1	3.4	
	b 3	やる気さえあれば専門的知識・技術は要求されない	19	7.0	9	5.2	3	10.3	
子どもとの接触視点	c 1	肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある	199	73.7	138	79.8	20	69.0	
	c 2	子どもが好きでなければつとまらない	235	87.0	147	85.0	24	82.8	
	c 3	子どもが好きかどうかは関係ない	5	1.9	2	1.2	0	—	
社会的評価	経済的待遇	d 1	他の職業に比べて過分の経済的待遇を受けている	1	0.4	0	—	0	—
		d 2	労働に見合った経済的待遇を受けている	4	1.5	2	1.2	2	6.9
		d 3	労働に比して経済的には十分報われていない	107	39.6	92	53.2	15	51.7
意義・使命	d'1	経済的にも報われ、社会的使命も大きい	16	5.9	14	8.1	6	20.7	
	d'2	経済的には報われないが、社会的使命や期待は大きい	148	54.8	94	54.3	17	58.6	
	d'3	経済的に報われているが社会的意義は小さい	3	1.1	1	0.6	0	—	
印象	印	d"1	はなやかで誰もがあこがれる	1	0.4	0	—	2	6.9
		d"2	外観ははなやかであるが、実態は地味である	30	11.1	16	9.2	8	27.6
		d"3	地味であり目立たない	103	38.1	64	37.0	10	34.5

注：NAは1年1，2年3，現職0である

(6つのMA)

全体をとおしていえることはいずれの学年，現職においても，上位の1～3位と下位の4～6位とでは順位の入れかわりがみられるが，同じ枠組と項目が選択されていることである。社会的評価のうちの印象が1年生，2年生，現職ともに7位になっており，やや低い評価となっている。この印象を除くと各枠組からひとつずつ項目（子どもとの接触視点からは2項目）が選ばれているが，子どもとの接触視点と業績に集中しているのが大きな特徴となっている。それにくらべて意義・使命，経済的待遇，属性の評価はやや低くなっている。

各枠組毎に選択されている項目についてみてみるとつぎのようになる。

属性については大部分の者が男性，女性ともに適しているという項目を選択しており，職業としての「保育」における性の差はあらわれていない。業績については大部分のものが専門的知識や技術を必要とすることを認識している。

子どもとの接触視点についてはほぼ全員が子どもが好きであること，肉親に対すると同じ

表 8 「保育」の把握（1位から6位まで）

学年 順位	1 年 生	2 年 生	現 職
1	子どもとの 接触視点 (c 2)	業 績 (b 1)	業 績 (b 1)
2	子どもとの 接触視点 (c 1)	子どもとの 接触視点 (c 2)	子どもとの 接触視点 (c 2)
3	業 績 (b 1)	子どもとの 接触視点 (c 1)	子どもとの 接触視点 (c 1)
4	意義・使命 (d'2)	意義・使命 (d'2)	意義・使命 (d'2)
5	属 性 (a 3)	経済的待遇 (d 2)	属 性 (a 3)
6	経済的待遇 (d 3)	属 性 (a 3)	経済的待遇 (d 3)

ような愛情をもつ必要があることが職業としての「保育」に必要なことを指摘している。

社会的評価のうち、経済的待遇についてはほとんど大部分の者が労働に比して経済的には十分に報われていないとみている。意義・使命については経済的には報われないが、社会的使命や期待は大きいと評価する者の割合がかなり高く、意義・使命を否定したり低く評価するものはきわめてわずかである。印象については地味であり目立たないとみるものが多いが、外観ははなやかであるが、実態は地味であるとみているものもいる。

つぎに学年別、就職希望先種別毎に職業としての「保育」をとらえる視点をくわしく分析していくことにする。

まず学年別にみる。

1年生の場合、表8で整理したように、子どもとの接触視点の2つの項目が1～2位と高い比率であげられており、子どもとの接触視点がもっとも重要視されている。すなわち、子どもが好きであること、肉親にたいすると同じような愛情をもつことが職業としての「保育」にとってもっとも重要な視点としてとらえられているのが大きな特徴である。職業としての「保育」にとって業績としての専門的知識、技術を必要とするのとらえる比率は、子どもとの接触視点よりも下位にある。属性としての性については保育者は男性にも女性と同様に適していると認識し、それを職業としての「保育」をとらえる視点にあげているものが半数近くいるのが注目される。

2年生になると、1年生の場合とは異なり、業績の比率が20%以上もふえ第1位となっているのが大きな特徴となっている。子どもとの接触視点は1年生の場合と同じ程度の比率となっており、職業としての「保育」をとらえる重要な視点になっていることにはかわりはないが、それ以上に専門的知識、技術がよりいっそう必要であるという認識が高まっている。また、属性と経済的待遇の順位が1年生とは入れかわっており、労働にみあった経済的待遇を受けていないとみるものの比率が高くなっている。社会的使命については同じレベルにある。このような結果をみていることの大きな要因のひとつとしては保育所や幼稚園における実習体験によって、すなわち保育者の仕事をみることや子どもたちと接することによって現実を知る機会があったことにあると考えられる。

現職の場合はどうか。2年生の場合と同様の傾向をみせ、業績と「子どもが好きでなければならない」という接触視点が同じ比率で上位にある。接触視点のうち「肉親に対すると同じ

ような愛情をもつ必要がある」にとするもの比率は第3番目であるが1年生, 2年生にくらべて低くなっている。また, 経済的待遇や意義使命については2年生とほぼ同じであるが, 属性の「男性にも女性と同じように適している」ととらえている者は1年生, 2年生より高い比率となっている。

つぎに就職希望先別に職業としての「保育」をとらえる視点がどのように分布しているかをみてみよう。以下では, 幼稚園, 保育所についてのみ分析し, 施設は対象が2ケースなのでとりあげないことにする。

1年生の幼稚園を希望する者について比率の高いものから6つの項目をあげてみると, ①c 2—子どもが好きでなければつとまらない (93.2%), ②c 1—肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある (80.8%), ③b 1—専門的知識や技術をより多く必要とする (64.4%), ④d' 2—経済的には報われないが, 社会的使命や期待は大きい (58.9%), ⑤d 3—労働に対して経済的には十分報われていない (46.6%), ⑥a 3—男性にも女性と同じよ

表9 職業としての「保育」の把握(2)—就職希望先種別

枠組	番号	項目	幼稚園		保育所		施設	
			1年生 (N=73)	2年生 (N=80)	1年生 (N=61)	2年生 (N=65)	1年生 (N=7)	2年生 (N=2)
属性	a 1	女性にのみ適している	—	1.3	—	—	—	—
	a 2	現代の日本では女性により適している	2.7	16.3	1.6	18.5	—	—
	a 3	男性にも女性と同じように適している	45.2	41.3	52.5	47.7	71.4	50.0
業績	b 1	専門的知識や技術をより多く必要とする	64.4	83.8	60.7	86.2	71.4	100.0
	b 2	それほど専門的知識や技術を必要としない	1.4	—	4.9	1.5	—	—
	b 3	やる気さえあれば専門的知識・技術は要求されない	6.8	6.3	4.9	4.6	14.3	—
子どもとの接触視点	c 1	肉親に対すると同じような愛情をもつ必要がある	80.8	77.5	75.4	83.1	100.0	100.0
	c 2	子どもが好きでなければつとまらない	93.2	90.0	83.6	80.0	100.0	100.0
	c 3	子どもが好きかどうかはあまり関係ない	2.7	—	1.6	3.1	—	—
社会的評価	d 1	他の職業に比べて過分の経済的待遇を受けている	1.4	—	—	—	—	—
	d 2	労働に見合った経済的待遇を受けている	—	1.3	3.3	1.5	—	—
	d 3	労働に比して経済的には十分報われていない	46.6	52.5	42.6	56.9	14.3	—
印象	d' 1	経済的にも報われ, 社会的使命も大きい	4.1	12.5	8.2	4.6	—	—
	d' 2	経済的には報われないが, 社会的使命や期待は大きい	58.9	52.5	65.6	56.9	57.1	50.0
	d' 3	経済的に報われているが, 社会的意義は小さい	1.4	—	1.6	—	—	—
印象	d" 1	はなやかで誰もがあこがれる	—	—	1.6	—	—	—
	d" 2	外観ははなやかであるが, 実態は地味である	15.1	15.0	11.5	3.1	—	—
	d" 3	地味であり目立たない	34.2	38.8	42.6	40.0	28.6	50.0

注: 就職先が未定, NAは除く

(6つのMA)



らに適している(45.2%)，となっている。保育所を希望する者については，幼稚園の場合とほぼ同じ項目が選択されているので記号のみで比率の高い項目をあげると①c 2(83.6%) ②c 1(75.4%)，③d' 2(65.6%)，④b 1(60.7%)，⑤a 3(52.5%)，⑥d 3(42.6%)，⑥d'' 2—地味であり目立たない(42.6%)となっている。

2年生の場合はどうか。幼稚園については①c 2(90.0%)，②b 1(83.8%)，③c 1(77.5%)，④d 3(42.5%)，④d' 2(52.5%)，⑥a 3(41.3%)となっている。保育所については①b' 1(86.2%)，②c 1(83.1%)，③c 2(80.0%)，④d 3(56.9%) ④d' 2(56.9%)，④a 3(47.7%)になっている。

以上の結果を比率の高い枠組の順で表にまとめてみるとつぎのようになる。

表10 就職希望先別「保育」の把握(1位から6位まで)

種別 順位	幼稚園		保育所	
	1年生	2年生	1年生	2年生
1	子どもとの接触視点(c 2)	子どもとの接触視点(c 2)	子どもとの接触視点(c 2)	業績(b 1)
2	子どもとの接触視点(c 1)	業績(b 1)	子どもとの接触視点(c 1)	子どもとの接触視点(c 1)
3	業績(b 1)	子どもとの接触視点(c 1)	意義・使命(d 2)	子どもとの接触視点(c 2)
4	意義・使命(d' 2)	経済的待遇(d 3)	業績(b 1)	経済的待遇(d 3)
5	経済的待遇(d 3)	意義・使命(d' 2)	属性(a 3)	意義・使命(d' 2)
6	属性(a 3)	属性(a 3)	経済的待遇(d 3) 印象(d'' 3)	属性(a 3)

学年別に就職希望先種別をクロスさせてみるとつぎのようになる。

1年生の場合，幼稚園を希望する者，保育所を希望する者のいずれにおいても子どもとの接触視点が高い比率で1～2位となっているが，幼稚園の方にその比率が高く出ている。幼稚園希望者の方が子どもとの接触視点をより高く評価している。3～4位の業績と意義・使命については幼稚園希望者の場合は業績を重視し，保育所希望者の場合は意義・使命を重視する傾向にある。5～6位の属性と経済的待遇については幼稚園希望者の場合は経済的待遇が上位に，保育所希望者の場合は属性が上位になっている。また保育所希望者の場合には第6位に印象—地味であり目立たない—が幼稚園希望者よりも高い比率で経済的待遇に続いて入っている。

2年生はどうか。幼稚園希望者の場合は子どもとの接触視点——子どもが好きでないとつとまらない——が高い比率で第1位で，ついで業績となっている。これにたいして保育所希望者の場合は業績が第1位で，子どもとの接触視点がそれに続いている。第4～6位の経済的待遇，意義・使命，属性は幼稚園，保育所の希望者いずれの場合も同じ順位と比率となっている。傾向としては幼稚園希望者の方が子どもとの接触視点を，保育所希望者の方が業績をそれぞれに重視しているといえよう。

職業としての「保育」をとらえる視点の分析の最後に，就職希望先別に学年の差があるか

どうかについてふれておこう。

幼稚園希望者については1年生、2年生ともに「子どもが好きでなければつとまらない」とする接触視点が高い比率で第1位となっている。第2～3位の業績と接触視点では2年生において業績が高い比率で第2位となっており、1年生ではその比率はやや低く出ており第3位となっている。意義・使命、経済的待遇、属性の3つの枠組は1年生、2年生いずれも4～6位で順位、比率ともに同じような傾向をみせている。幼稚園希望者の職業としての「保育」をとらえる視点は子どもとの接触視点を重視する度合いが高いのが特徴的であるが、それに続いて比率の高い業績に関しては1年生と2年生とでは評価はかなり落差がみられる。

保育所希望者の場合は1年生と2年生とではかなりとらえ方が異っている。1年生では子どもとの接触視点が上位にあり、以下、意義・使命、業績、属性、経済的待遇、印象の順になっているが、2年生になると業績が第1位で子どもとの接触視点がそれに続き、やや比率は下がって経済的待遇、意義・使命、属性の順となっている。保育所希望者の場合は学年差が大きく、2年生になると業績を重視する傾向が強くあらわれている。また、2年生は1年生に比較して経済的待遇への関心が高まり、社会的使命、意義や属性の評価は低くなる傾向にある。

#### 4. 「保育者」であるための条件の認識

「保育者」であるための条件の認識をとらえる枠組は属性、業績、パーソナリティ、子どもとの接触視点の四つ、業績を知識・技術と免許・資格に細分化すると五つに分類することができる。さらに五つの枠組に三ずつ種類や程度をあらわす選択項目が用意されている。以下においては保育を学ぶ学生や現職に就いている保育者たちが「保育者」であるための条件をどのように認識をしているかをみていくことにする。

表11は15項目のなかから5項目を選択する多答方式で得られた結果を、15項目のそれぞれを条件としてとりあげた者の数の全調査対象者(学年別)にたいする百分比を示したものである。学年別に比率の高い上位五つまでの項目をあげてみると、1年生では①d2—子どもを深く正しく理解しようとする態度(89.3%)、②c1—安定した情緒や豊かな情操(83.3%)、③a1—激しい労働に耐えうる体力(68.1%)、④d1—子どもをこよなく愛する心(58.5%)、⑤b3—社会的一般常識の習得(39.3%)となっている。2年生では、①d2(95.4%)、②c1(88.4%)、③d1(61.2%)、④a1(56.6%)、⑤b2—音楽や造形など専門技術の習得(46.2%)となっている。現職では①c1—安定した情緒や豊かな情操(96.6%)、②d2(82.8%)、③a1(69.0%)、④d1(51.7%)、⑤c2—豊かな個性(48.3%)となっている。

以上の結果を比率の高い枠組の順で表にまとめてみると表12のようになる。

全体をとおしてしてみると、1～2年生と現職とでは「保育者」であるための条件の認識はかなり異なっている。1～2年生では免許・資格の枠組を除いた各枠組から1ないし2項目が比率が高い上位5項目に選択されて入っている。現職の場合は業績の枠組から選択された項目は上位5位に入っていない。パーソナリティの枠組に重点がおかれている。総じて子どもとの接触視点、パーソナリティを「保育者」の条件としてあげる比率が高く、ついで身体能力という属性があげられ、業績は低位にある。職業としての「保育」というレベルでとらえ

表11 「保育者」であるための条件(1)——学年別

枠組	番号	項目	1年(N=270)		2年(N=173)		現職(N=29)		
			実数	%	実数	%	実数	%	
属性	a 1	激しい労働に耐えうる体力	184	68.1	98	56.6	20	69.0	
	a 2	女性であること	0	—	0	—	0	—	
	a 3	できるだけ若いこと	1	0.4	2	1.2	0	—	
業績	知識や技術	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	49	18.1	50	28.9	10	34.4
		b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	81	30.0	80	46.2	6	20.7
		b 3	社会的一般常識の習得	106	39.3	50	28.9	7	24.1
	免許や資格	b' 1	免許や資格は必要	63	23.3	44	25.4	5	17.2
		b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	42	15.6	7	4.0	3	10.3
		b' 3	免許や資格は全く必要でない	0	—	0	—	0	—
パーソナリティ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	225	83.3	153	88.4	28	96.6	
	c 2	豊かな個性	25	9.3	30	17.3	14	48.3	
	c 3	豊かな協調性	69	25.6	42	24.3	12	41.4	
子どもとの接触視点	d 1	子どもをこよなく愛する心	158	58.5	106	61.2	15	51.7	
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	241	89.3	165	95.4	24	82.8	
	d 3	子どもがただ好きという気持	11	4.1	2	1.2	0	—	

注：NAは1年1，2年2である

(5つのMA)

表12

学年 順位	1年生	2年生	現職
1	子どもとの接触視点(d 2)	子どもとの接触視点(d 2)	パーソナリティ(c 1)
2	パーソナリティ(c 1)	パーソナリティ(c 1)	子どもとの接触視点(d 2)
3	属性(a 1)	子どもとの接触視点(d 1)	属性(a 1)
4	子どもとの接触視点(d 2)	属性(a 1)	子どもとの接触視点(d 1)
5	知識・技術(b 3)	知識・技術(b 2)	パーソナリティ(c 2)

るときは子どもとの接触視点と業績が重視されていたが、保育者というレベルでとらえるときは子どもとの接触視点とパーソナリティ、さらには属性が重視されているのに気づかれる。

各枠組毎に選択されている項目についてみてみるとつぎのようになる。

まず属性では、ほぼ全員ちかくが体力をあげている。女性であることを条件としているものは皆無である。年齢を条件に入れているものもごくわずかである。

業績のうち知識・技術については学年差があり、専門的知識、専門的技術、社会的一般常識が条件としてあげられている。免許・資格については、免許・資格を必要とするというものが多。

パーソナリティについては1～2年生と現職とでは相違がみられるが「安定した情緒や豊かな情操」が「保育者」として必要な条件であるとする者は、比率が高い点では学生、現職に共通している。「豊かな協調性」、「豊かな個性」を条件とする者はやや低くなっている。子どもとの接触視点については「子どもがただ好きという気持をもっている」ことを条件としてあげている者はわずかで、「子どもを深く正しく理解しようとする態度」がもっとも重視され、「子どもをこよなく愛する心」をもっているという条件がそれに続いている。

つぎに学年別、就職希望先種別毎に「保育者」であるための条件の認識についてくわしく分析していくことにする。

まず学年別にみる。

1年生の場合、表12に整理したように子どもとの接触視点とパーソナリティが、高い比率で「保育者」であるための条件としてあげられている。比率はやや低くなっているが属性が第3位になっている。知識・技術では専門的知識・技術より社会的一般常識を習得することの条件の方が比率的に高くなっており第5位に入っている。

2年生になると、第1～2位は子どもとの接触視点とパーソナリティとなっており、1年生と同様な順位にはなっているが比率的にはより高くなっている。また第3位にも子どもとの接触視点が入っている。子どもとの接触視点とパーソナリティ、すなわち、「子どもを深く正しく理解しようとする態度」、「子どもをこよなく愛する心をもつこと」、「安定した情緒や豊かな情操をもつこと」が「保育者」であるための最大の条件として認識していることになる。それは1年生の場合よりもいっそう強いものとなっている。また、属性、業績については、1年生で属性を条件とするものが比率的には第3位であったのが、2年生ではその比率が下り第4位となっており、業績の面では1年生で第5位にあった社会的一般常識の習得の比率と順位は2年生になると下り、音楽や心理学などの専門的技術・知識の習得を条件としてあげるものが増加し第5位の比率となっている。

現に保育者として働いている者は「保育者」であるための条件をどのようにとらえているであろうか。もっとも高い比率で条件としてあげられているのは「安定した情緒と豊かな情操」というパーソナリティであり、96.6%とほぼ全員が指摘している。ついで「子どもを深く正しく理解しようとする態度」という接触視点、体力という属性、「子どもをこよなく愛する心」をもつという接触視点、「豊かな個性」をもつというパーソナリティの項目が第2位から第5位にあげられている。さらに「豊かな協調性」が1～2年生にくらべて高い比率で第6位に入っている。1～2年生との比較ではパーソナリティの三つの項目いずれもが比率的に高くなっており、「安定した情緒や豊かな情操」は当然としても、「豊かな個性」や「豊かな協調性」を「保育者」であるための条件としてあげる比率が高くなっている。これにたいして子どもとの接触視点を条件としてあげる者の比率は1～2年生にくらべてやや下まわっている。また、業績は上位5位には入らず低い比率となっているが、「教育学や心理学などの専門的知識の習得」を条件とする者の比率が1～2年生にくらべて高くなっているのが注目される。以上のことから現職の「保育者」としての条件をとらえる視点の大きな特徴は

学生以上にパーソナリティに重点がおかれているといえる。このことは実際に保育に携わっている現実のなかで対児童の関係、職員間の人間関係がより重要な要素となっていることのあらわれであるといえよう。

つぎに就職希望先別に「保育者」であるための条件の認識についてみていくことにする。以下では表13により幼稚園、保育所、施設それぞれを希望する者について分析をすすめる。なお、施設希望者はケース数が少ないので数値的には参考にとりあげることにし一応の傾向をみるにとどめる。

1年生の幼稚園を希望する者について比率の高いものから5つの項目をあげてみると①c 1—安定した情緒や豊かな情操(90.4%)、②d 2—子どもを深く正しく理解しようとする態度(87.7%)、③a 1—激しい労働に耐えうる体力(63.0%)、③d 1—子どもをこよなく愛する心(63.0%)、⑤b 3—社会的一般常識の習得(42.5%)となっている。保育所希望者の場合は、幼稚園の場合と同じ項目が選択されているので記号のみで記すと、①d 2(95.1%)、②c 1(85.2%)、③a 1(80.3%)、④d 1(59.0%)、⑤b 3(44.3%)となっている。施設希望者の場合は①c 1(85.7%)、①d 2(85.7%)、③d 1(71.4%)、④a 1(57.1%)、⑤c 3(42.9%)となっている。

2年生の場合を幼稚園希望者からみていくと、①d 2(96.3%)、②c 1(86.3%)、③d 1(58.8%)、④a 1(57.5%)、⑤b 2(47.5%)となっている。保育所希望者では、①d 2(98.5%)、②c 1(92.3%)、③d 1(64.6%)、④a 1(55.4%)、⑤b 2(44.6%)となっている。施設希望者の場合は①d 2(100.0%)、①a 1(100.0%)、③b 1(50.5%)、③c 1(50.0%)、③c 3(50.0%)、③d 1(50.0%)となっている。

以上の結果を比率の高い枠組の順に整理すると表14のようになる。

学年別に就職希望先種別をクロスさせてみるとつぎのようになる。

1年生では、いずれの就職希望先の場合も子どもとの接触視点とパーソナリティが「保育者」であるための条件として高い比率であげられている。保育所希望者においては子どもとの接触視点を重視する度合いが他の希望先よりもやや高くなっている。属性はいずれの就職希望者の場合も子どもとの接触視点—子どもを愛する心—とならんで3～4位の比率となっているが、保育所希望者にその比率が高くなっている。また体力が保育者にとって重要な条件として選ばれている。知識・技術は相対的に低い評価となっているが、そのなかでは幼稚園、保育所希望者の場合に「社会的一般常識の習得」をあげる比率が高いが、施設希望者の場合は「専門的知識・技術」をあげる比率が高くなっている。このようなことから就職希望先により「保育者」としての条件をとらえる視点は異なっていることがわかる。

2年生の場合はどうであろうか。比率の高い順にみた枠組の順位は幼稚園希望者と保育所希望者ともに同じである。比率からみて差が多少ともある項目をみてみると、保育所にくらべと幼稚園の方に高いものは「社会的一般常識の習得」、「豊かな協調性」などである。逆に幼稚園よりも保育所の方が高いものは、専門的知識、「安定した情緒や豊かな情操」、「子どもをこよなく愛する心」などである。両者の間にとりたてて大きな差異がみられるほどではない。

つぎに就職希望先別にみて「保育者」であるための条件をとらえる視点に学年差がどの程度にあらわれているかをみていくことにする。

表13 「保育者」であるための条件(2)——就職希望先種別

枠組	番号	項目	幼稚園		保育所		施設		
			1年生 (N=73)	2年生 (N=80)	1年生 (N=61)	2年生 (N=65)	1年生 (N=7)	2年生 (N=2)	
属性	a 1	激しい労働に耐えうる体力	63.0	57.5	80.3	55.4	57.1	100.0	
	a 2	女性であること	—	—	—	—	—	—	
	a 3	できるだけ若いこと	—	2.5	1.6	—	—	—	
業績	知識や技術	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	6.8	27.5	18.0	33.8	28.6	50.0
		b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	28.8	47.5	24.6	44.6	28.6	—
		b 3	社会的一般常識の習得	42.5	33.8	44.3	26.2	14.3	—
業績	免許や資格	b' 1	免許や資格は必要	26.0	26.3	18.0	27.7	14.3	—
		b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	9.6	3.8	13.1	4.6	14.3	—
		b' 3	免許や資格は全く必要でない	—	—	—	—	—	—
パーソナリティ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	90.4	86.3	85.2	92.3	85.7	50.0	
	c 2	豊かな個性	9.6	18.8	3.3	15.4	—	—	
	c 3	豊かな協調性	31.5	25.0	21.3	16.9	42.9	50.0	
子どもとの接触視点	d 1	子どもをこよなく愛する心	63.0	58.8	59.0	64.6	71.4	50.0	
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	87.7	96.3	95.1	98.5	85.7	100.0	
	d 3	子どもがただ好きという気持ち	2.9	1.3	3.3	3.1	28.6	—	

注：就職先が未定、NAは除く

(5つのMA)

表14 「保育者」の条件 (1位から5位まで)

種別 順位	幼稚園		保育所		施設	
	1年生	2年生	1年生	2年生	1年生	2年生
1	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点(d 2)	子どもとの 接触視点(d 2)	子どもとの 接触視点(d 2)	パーソナリティ (c 1)	属性(a 1)
2	子どもとの 接触視点(d 2)	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 1)	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点(d 2)	子どもとの 接触視点(d 2)
3	属性(a 1)	子どもとの 接触視点(d 1)	属性(a 1)	子どもとの 接触視点(d 1)	子どもとの 接触視点(d 1)	知識・技術 (b 1)
4	子どもとの 接触視点(d 1)	属性(a 1)	子どもとの 接触視点(d 1)	属性(a 1)	属性(a 1)	パーソナリティ (c 1) パーソナリティ (c 3)
5	知識・技術 (b 3)	知識・技術 (b 2)	知識・技術 (b 3)	知識・技術 (b 2)	パーソナリティ (c 3)	子どもとの 接触視点(d 1)

幼稚園希望者ではパーソナリティ—安定した情緒や豊かな情操—と子どもとの接触視点—子どもを深く正しく理解しようとする態度—が高い比率で「保育者」であるための条件としてあげられているが、1年生ではパーソナリティが、2年生では子どもとの接触視点を重視する傾向にある。属性については1年生の方がやや比率が高い。「専門的知識、技術の習得」は2年生においてもより重視される傾向にある。

保育所希望者の場合も幼稚園希望者と同様子どもとの接触視点とパーソナリティがきわめて高い比率で「保育者」であるための条件としてあげられており、1年生より2年生にその比率がより高まっている。いわばこの二つの項目が「保育者」であるために欠かせない条件として認識されている。属性については2年生になると評価はかなり低くなり、体力をとくに重視はしない傾向となっている。それに反して2年生では専門的知識、技術を条件としてあげる比率が高くなっており、業績を重視する方向がみられる。

##### 5. 「保育者」としての適性の自己評価

これまでにとりあげてきたのはいわば学生が望ましいとする「保育者像」である。これにたいして自分自身が「保育者」であるための条件を備えているかどうかの判定、いわゆる適性の自己評価を保育者をめざし学習している学生たちはどのようにとらえているであろうか。

まずはじめに表15により保育者としての適性の自己評価がどのようになされているかをみてみよう。ここでは非常に適している——やや適している——どちらともいえない（わからない）——あまり適していない——全く適していない、の5段階評価を要求している。1年生では「非常に適している」とする者が4.1%、「やや適している」とする者が29.3%であり、適性ありと自己評価している者があわせて33.4%と全体のちょうど1/3となっている。これにたいして「あまり適していない」とする者が2.6%、「全く適していない」とする者が0%となっており、適性なしと自己評価する者はきわめてわずかである。残りの63.7%の者が「どちらともいえないもしくはわからない」と回答しており、入学して間もない時期としては当然のことながら、また評価の枠組が与えられているにしても、過半数のものにとっては自己の適性を評価をすることは困難なようである。

2年生の場合はどうか。「非常に適している」とする者が11.6%、「やや適している」とする者が46.2%で、あわせると57.8%、全体の約6割が適性ありと自己評価をしている。適性なしとみている者はあわせて2.3%である。「どちらともいえないもしくはわからない」とする者が37.0%となっている。ここで注目されるのは2年生になっても「保育者」としての適性が自己に備わっているかどうかを見定めることがまだできていないものが4割ちかく存在しているということである。その理由は後にみる。また、「保育者」としての適性がないとみなしている者が1年生、2年生を通じて2%台で絶対数はわずかではあるが一定の比率で存在していることも見落してはならない。

現に保育者として現職に就いている者の場合はどうか。「非常に適している」とする者が3.4%、「やや適している」とする者が55.2%となっており、適性ありとみているものをあわせると58.6%となる。適性なしと自己評価しているものは10.3%、そして「どちらともいえないもしくはわからない」とする者が31.0%となっている。ここで注目されるのは、調査

表15 「保育者」としての適性の自己評価(1)

	1年(N=270)		2年(N=173)		現職(N=29)	
	実数	%	実数	%	実数	%
非常に適している	11	4.1	20	11.6	1	3.4
やや適している	79	29.3	80	46.2	16	55.2
どちらともいえない(わからない)	172	63.7	64	37.0	9	31.0
あまり適していない	7	2.6	3	1.7	3	10.3
全く適していない	0	—	1	0.6	0	—
NA	1	0.4	5	2.9	0	—

対象者が少ないので断定的なことはいえないが、「非常に適している」とみる者がきわめてわずかであること、適性なしとするものが1割もいること、そして現職につきながらも「保育者」としての適性を十分につかんでいない、あるいは「保育者として必要な条件を不十分にしか備えていない」と評価するものが $\frac{1}{3}$ ちかくいることである。

つぎに適性あり、適性なし、わからないと自己評価するそれぞれの理由をみていくことにしよう。「保育者」としての適性をみる理由は、前節の「保育者」であるための条件で用いた分析枠組の各項目の説明文のうち、肯定形の文章が適性あり、否定形の文章が適性なしとして用意されている。なお、業績の枠組のうちで免許、資格についてのみ選択項目は「免許・資格の取得の見込み」だけにしてある。

表16によって保育者としての適性があると評価している者の評価の理由をみる。五項目を選択する多答方式により選択された比率の高い項目の上位五つをあげてみると、1年生では①d1—子どもをこよなく愛する心をもっている(70.0%)、②d2—子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている(66.7%)、③a1—激しい労働に耐える体力をもっている(48.9%)、④c1—情緒が安定し情操が豊かである(33.3%)、⑤d3—子どもがただ好きである(28.9%)となっている。2年生では①d2(70.0%)、②d1(70.0%)、③a1(53.0%)、④b'1—免許・資格がとれる見込みがある(42.0%)、⑤c3—豊かな協調性がある(36.0%)となっている。現職では①d1(76.5%)、②d2(70.6%)、③a1(64.7%)、④d3(41.2%)、⑤b1—専門的知識を習得している(29.4%)、⑤c1(26.4%)となっている。

以上の結果をまとめてみると表17のようになる。

全体をとおしてみてみると、いずれの学年においても子どもとの接触視点が高い比率で上位にあり、ついで属性となっている。4位以下は比率的にやや低くなっているのと学年により差がある。パーソナリティ、業績は上位の3つの項目にくらべて比率が低く出ている。学年比較でみてみると子どもとの接触視点では大差はないが、現職で体力を重視している者の比率が1～2年生にくらべて高いこと、2年生や現職で専門的知識や技術を習得していることをあげる比率が高いこと、1～2年生が現職よりもパーソナリティを重視していること、



表16 「保育者」としての適性の自己評価(2)——適している理由

枠組	番号	項目	1年(N=90)		2年(N=100)		現職(N=17)		
			実数	%	実数	%	実数	%	
属性	a 1	激しい労働に耐えうる体力をもっている	44	48.9	53	53.0	11	64.7	
	a 2	女性であるから	0	—	1	1.0	0	—	
	a 3	若いから	0	—	3	3.0	2	11.8	
業績	知識・技術	b 1	専門的知識を習得している	0	—	22	22.0	5	29.4
		b 2	専門的技術を習得している	4	4.4	17	17.0	2	11.8
		b 3	社会的一般的常識をもっている	10	11.1	8	8.0	3	17.6
	免許資格	b'1	免許や資格がとれる見込みがある	17	18.9	42	42.0		
パーソナリティ	c 1	情緒が安定し情燥が豊かである	30	33.3	34	34.0	5	29.4	
	c 2	個性が豊かである	12	13.3	18	18.0	3	17.6	
	c 3	豊かな協調性がある	21	23.3	36	36.0	3	17.6	
子どもとの接触視点	d 1	子どもをこよなく愛する心をもっている	63	70.0	70	70.0	13	76.5	
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている	60	66.7	73	73.0	12	70.6	
	d 3	子どもがただ好きである	26	28.9	14	14.0	7	41.2	

(5つのMA)

表17 適性の自己評価(1位から5位まで)

学年 順位	1年生	2年生	現職
1	子どもとの接触視点(d 1)	子どもとの接触視点(d 2)	子どもとの接触視点(d 1)
2	子どもとの接触視点(d 2)	子どもとの接触視点(d 1)	子どもとの接触視点(d 2)
3	属性(a 1)	属性(a 1)	属性(a 1)
4	パーソナリティ(c 1)	免許・資格(b'1)	子どもとの接触視点(d 3)
5	子どもとの接触視点(d 3)	パーソナリティ(c 3)	知識・技術(b 1) パーソナリティ(c 1)

などの傾向がみられる。

以上のように「保育者」として適していると評価する者は、「子どもを愛し、深く正しく理解しようとする態度を身につけ、そして激しい労働にも耐えうる体力をもっている」という主たる理由により自ら適性ありとみなしているといえよう。学習が深まり実習などを経験した後や現職に就いている場合などは、主たる条件に引続く条件は相違している。

「保育者」として適していないと自己評価している者があげている理由は何であろうか。表18で適性ありとする場合と同じ枠組で整理してあるが、回答者数がわずかであるために分

表18 「保育者」としての適性の自己評価(4)——適していない理由

枠組	番号	項目	1年(N=7)		2年(N=4)		現職(N=3)		
			実数	%	実数	%	実数	%	
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力をもっていない	2	28.6	2	50.0	1	33.3	
	a 2	女性でないから	/	/	/	/	/	/	
	a 3	若くないから	0	—	0	—	0	—	
業 績	知識・ 技術	b 1	専門的知識を習得していない	3	42.9	1	25.0	2	66.7
		b 2	専門的技術を習得していない	1	14.3	2	50.0	3	100.0
		b 3	社会的一般的常識をもっていない	3	42.9	1	25.0	1	33.3
	免許 資格	b' 1	免許や資格がとれる見込みがない	1	14.3	1	25.0	/	/
パ ー ソ ナ リ テ ィ	c 1	情緒が安定せず情操が豊かでない	1	14.3	2	50.0	2	66.7	
	c 2	個性が豊かでない	0	—	2	50.0	2	66.7	
	c 3	豊かな協調性がない	1	14.3	1	25.0	2	66.7	
子 ど も と の 接 触 視 点	d 1	子どもをこよなく愛する心をもっていない	4	57.1	1	25.0	0	—	
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけていない	6	85.7	1	25.0	2	66.7	
	d 3	子どもが好きでない	2	28.6	0	—	0	—	

注：NAは2年次に1

(5つのMA)

析は困難であるので大まかな傾向のみをとらえておこう。1年生の場合は子どもとの接触視点が身につけていないことがもっとも大きい理由としてあげられ、ついで知識、技術の習得がなされていないことがあげられている。2年生ではパーソナリティが保育者に向いていない、専門的技術が習得できていない、体力に自信がないなどが理由となっている。現職では専門的知識、技術の習得が不十分、パーソナリティが向いていないなどが理由としてあげられている。

表19 「保育者」としての適性の自己評価(3)——どちらともいえない場合の理由

	1年(N=172)		2年(N=64)		現職(N=9)	
	実数	%	実数	%	実数	%
自分の性格や適性を十分に理解していない	53	30.8	16	25.0	2	22.2
保育者として必要な能力を十分に習得していない	81	47.1	39	60.9	5	55.6
保育者であるための必要条件を十分に理解していない	25	14.5	5	7.8	2	22.2
その他	10	5.8	4	6.3	0	—
N A	3	1.7	0	—	0	—

つぎに保育者としての適性があるかどうかわからず「どちらともいえない」と評価してい

る場合の理由をさぐってみよう。これについては表19に示したように「自分の性格や適性を十分に理解していない」、「保育者として必要な能力を十分に習得していない」、「保育者であるための必要条件を十分に理解していない」の3項目から1項目を選択する方法を採用してある。

1年生の場合は「保育者として必要な能力を十分に習得していない」が47.1%と半数にちかく、ついで「自分の性格や適性を十分に理解していない」が30.8%、「保育者であるための必要条件を十分に理解していない」が14.5%となっている。2年生になると「保育者として必要な能力を十分に習得していない」が60.9%と過半数をこえ、「自分の性格や適性を十分に理解していない」が25.0%、「保育者であるための必要条件を十分に理解していない」が7.8%と続いている。

保育者としての適性があるかどうかわからない理由のもっとも大きなものは保育者として必要な能力を十分に習得していないことにある。自分の性格や適性を十分に理解していないものの比率は2年生や現職よりも1年生にやや多くなっている。

最後に保育者であるための条件の一般的評価と保育者として適性ありとする者の自己評価とを対応させて「望ましい保育者像」と「自己像」の異同をみておきたい。表20は既出の表11と表16を再掲の形で組みあわせたものであり、表21は表12と表17を同様に対比させたものである。それらの表をもとに若干の分析を試みていくことにする。

学年別に1年生からみていこう。一般的評価と自己評価との間に比率の差が大きな枠組と項目をとりあげてみると、一般的評価にたいして自己評価が低い比率となっている項目としては「激しい労働に耐える体力」、「専門的知識、技術の習得」、「社会的一般常識の習得」、「安定した情緒や豊かな情操」、「子どもをこよなく愛する心」である。これらの項目は「保育者」であるための条件として考えられてはいるけれども自己には十分備わっていないとみていることを示している。逆に一般的評価より自己評価の方が高い比率となっている項目は「子どもをこよなく愛する心」と「子どもがただ好きという気持」である。以上のことから望ましい保育者像と自己像とではかなりの落差があることをはっきりと読み取ることができる。一般的評価で高い比率が出ていた「子どもを深く正しく理解しようとする態度」の子どもとの接触視点、「安定した情緒や豊かな情操」というパーソナリティ、「激しい労働に耐える体力」という属性において大きな落差がみられる。とりわけパーソナリティで落差が大きい。また、一般的評価において比較的低い比率が出ていた知識、技術という業績面はいつも低い比率となって差があらわれている。

2年生でも同様な傾向がみられる。属性を除いて、1年生と同様に「子どもを深く正しく理解しようとする態度」という子どもとの接触視点、「安定した情緒や豊かな情操」というパーソナリティ、「専門的技術の習得」、「社会的一般常識の習得」という業績の項目で自己評価の比率が一般的評価のそれを大きく下回っており、とくにパーソナリティと業績の枠組で落差が著しい。

現職では一般的評価と自己評価の比率の差が大きい項目は、自己評価の方が大きく下まわるのはパーソナリティの枠組の3項目であり、逆に自己評価の方が大きく上まわるのは子どもとの接触視点のうち「子どもをこよなく愛する心」と「子どもがただ好きという気持」の項目と、「できるだけ若いこと」という年齢の属性である。業績については自己評価の方が

表20 「保育者」であるための条件の一般的評価と「保育者」としての適性ありとする自己評価との対応

枠組	番号	項目	1 年 生		2 年 生		現 職		
			一般的 評価	自己評価	一般的 評価	自己評価	一般的 評価	自己評価	
属 性	a 1	激しい労働に耐えうる体力	68.1	48.9	56.6	53.0	69.0	64.7	
	a 2	女性であること	—	—	—	1.0	—	—	
	a 3	できるだけ若いこと	0.4	—	1.2	3.0	—	11.8	
業 績	知識・ 技術	b 1	教育学や心理学など専門的知識の習得	18.1	—	28.9	22.0	34.4	29.4
		b 2	音楽や造形など専門的技術の習得	30.0	4.4	46.2	17.0	20.7	11.8
		b 3	社会的一般常識の習得	39.3	11.1	28.9	8.0	24.1	17.6
	免許・ 資格	b' 1	免許や資格は必要	23.3	18.9 (注)	25.4	42.0 (注)	17.2	/
		b' 2	免許や資格は必ずしも必要でない	15.6		4.0		10.3	
		b' 3	免許や資格は全く必要でない	—		—		—	
パーソ ナリ ティ	c 1	安定した情緒や豊かな情操	83.3	33.3	88.4	34.0	96.6	29.4	
	c 2	豊かな個性	9.3	13.3	17.3	18.0	48.3	17.6	
	c 3	豊かな協調性	25.6	23.3	24.3	16.0	41.4	17.6	
子ども との 接触 視点	d 1	子どもをこよなく愛する心	58.5	70.0	61.2	70.0	51.7	76.5	
	d 2	子どもを深く正しく理解しようとする態度	89.3	66.7	95.4	73.0	82.8	70.6	
	d 3	子どもがただ好きという気持ち	4.1	28.9	1.2	14.0	—	41.2	

表11と表16の再掲

注：自己評価の欄の免許・資格は取得見込みがある者の比率である

表21 表12×表17 (1位から5位まで)

学年 順位	1 年 生		2 年 生		現 職	
	望ましい 保育者像	自 己 像	望ましい 保育者像	自 己 像	望ましい 保育者像	自 己 像
1	子どもとの 接触視点(d 2)	子どもとの 接触視点(d 1)	子どもとの 接触視点(d 2)	子どもとの 接触視点(d 2)	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点(d 1)
2	パーソナリティ (c 1)	子どもとの 接触視点(d 2)	パーソナリティ (c 2)	子どもとの 接触視点(d 1)	子どもとの 接触視点(d 2)	子どもとの 接触視点(d 2)
3	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)	子どもとの 接触視点(d 1)	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)	属 性 (a 1)
4	子どもとの 接触視点(d 2)	パーソナリティ (c 1)	属 性 (a 1)	免許・資格 (b' 1)	子どもとの 接触視点(d 1)	子どもとの 接触視点(d 3)
5	知識・技術 (b 3)	子どもとの 接触視点(d 3)	知識・技術 (b 2)	パーソナリティ (c 3)	パーソナリティ (c 2)	知識・技術 (b 1) パーソナリティ (c 1)

表12と表17の再掲

比率は低くなっているが、とくに大きな差ではない。

全体をとおした傾向としては、安定したパーソナリティ、正しい子どもとの接触視点、業

績という面で望ましい保育者像と保育者として適性ありとする場合の自己像とでは大きな落差がみられる。とくに1～2年生では業績、現職ではパーソナリティ（豊かな個性、豊かな協調性をふくめて）にそのような傾向が強くあらわれている。その逆に1～2年生、現職を通して、「子どもをこよなく愛する心」、「子どもが好きという気持」という一般的評価では相対的に比率が低かった項目の比率が高くなっており、それが自分が保育者として適しているという理由となっている。総じて、望ましい「保育者」の条件にパーソナリティがあげられていたのが、自己適性としてのその評価はきわめて低くなり、子どもとの接触視点を自己の「保育者」の適性として重視する傾向にあるといえよう。

## 6. まとめ

### (1) 職業としての「保育」をとらえる視点

職業としての「保育」をとらえる視点は、1年生では子どもとの接触視点が、2年生と現職では業績と子どもとの接触視点が重視されている。1年生にくらべて2年生と現職に業績——専門的知識や技術をより多く必要とするという認識が深まっていること、経済的待遇——労働に比して経済的には十分報われていないという現実認識をする者の比率が高くなっていることが大きな特徴となっている。就職希望先種別にみた場合では、1年生では幼稚園希望者、保育所希望者ともに子どもとの接触視点を重視している。2年生では保育所希望者に業績を重視する比率がやや高くなっている。

このように学年別、就職希望先種別で職業としての「保育」をとらえる視点は異なっている。このことは講義や演習などによる学習の深まりや実習により現場を知ることなどによって認識の変化があらわれていることを示しているといえよう。

### (2) 「保育者」であるための条件の認識

「保育者」であるための条件は、1年生では子どもとの接触視点——子どもを深く正しく理解しようとする態度——とパーソナリティ——安定した情緒と豊かな情操——が重要であると認識している。2年生ではこのような傾向がより強調されている。これにたいして現職ではパーソナリティがとくに重視されている。就職希望先種別ではとくに大きな違いはみられない。

「保育者」であるための条件の認識は学生と現職との間において差異があらわれている。1年生と2年生の間には顕著な差異はみられなかった。このことは現実に保育に携さわっているかどうかにかかわっているといえよう。職業として「保育」をとらえるときは業績が重視される傾向にたいして、「保育」に携さわる人間としてとらえるときはパーソナリティが重視される傾向がある。

### (3) 「保育者」であるための条件の認識と自己適性の評価

保育者として自己が適しているとみなす者は1年生で33.4%、2年生で57.8%、現職で58.6%となっている。これら保育者として適していると自己評価する者についてその理由をたずねてみると、いずれの学年においても子どもとの接触視点や属性が上位にあり、パーソナリティや業績は下位にある。先にみた「保育者」であるための条件の認識とを対応させて

みると大きな落差があることがわかる。すなわち、「保育者」として望ましい条件としてあげられているものが自己には十分に備わっていないことを自覚していることを意味し、また、子どもとの接触視点については「子どもを深く正しく理解しようとする態度」というよりも「子どもをこよなく愛する心」「子どもが好きという気持」を持っていることによって適性を評価していることが注目される。

### III 今後の課題

本研究はこの度漸く着手したものであり、本報告はその方法試論を問うたものである。したがって、われわれが抱えている課題は途方もなく大きく、また今時点ではまだ十分に明らかになっていないこと柄も多い。以下に考えられるいくつかの課題をあげておく。

まずはじめに、本研究はすでに述べたように、二ヶ年の保育者養成課程で学生が「保育」をどのように認識していくか、その過程を明らかにしようとするものである。したがって、この過程は職業の社会化 (socialization) にほかならない。この職業の社会化過程では、その担い手 (エージェント) は多岐にわたっている。「保育」についての理解、認識を得、深める場や機会は実にさまざまである。本研究では、このための場や機会 (エージェント) の一つとして実習を捉えているが、当初述べた研究目的を達するためにこれで十分か、という議論は当然出てこよう。各実習をポイントとして捉えているが、その時点で習得しているとする「保育」認識内容は果して実習だけがインパクトとなったかどうか。理解や認識を深めるための情報源を実習だけに限定しているが、このほかに、たとえば講義やゼミナールなどがどう作用しているか。いくつか複数のインパクトが考えられるばあい、それらの組合せをいく通りか想定してみることはできるかどうか。

つぎに「保育者」として、幼稚園教諭や保育所保母、さらに児童福祉施設保母などを同一レベルで捉えている。たしかに、これらが、ひとしく子どもの社会化の担当者であり、子どもの成長・発達をはかる営みをはたしている点では同一であろう。しかし、それぞれへの社会的期待や現実にはたしている役割・機能などは決して一様ではない。したがって、これら一つひとつがもつ特性に留意して「保育者」としての考察を行なっていく必要はあると思われる。

第三に、よりよい保育者を養成するためには、よりよい「保育」認識を得させなければならない。本報告ではそれについての枠を提示したにすぎない。あるべき、適当な、そして認識すべき「保育」とは、すなわち望ましい保育者像とはどういうものかの考察も、この研究と併行して進めなければならない。われわれ養成校の教師が抱く保育者像と現職の保育者の抱くそれとが一致しているか、ズレているか、さらに現職のなかでさまざまなステータスによっても、あるべき保育者像は異なるかもしれない。こうしたズレや不一致は放置しておいてよい問題では決してない。お互いがそれぞれの立場から意見を出し合い、子どものために「望ましい」保育者像を検討していきたいものである。

加えて、少々技術的な問題となるが、調査項目のワーディングにまだまだ考慮の余地がある。細かすぎる部分がある一方大雑把であったり、また抽象的にすぎる面があるなど、いろいろ改めたり工夫したり、補ったりする必要がある。

以上、研究のための方法試論を提出するにあたり、思いまたるいくつかの課題を並べた。この段階では、これらはまだまだ十分な問題提起とまではいかない。今後、研究をすすめるにつれ、これらを一層検討すると共に、新たな課題も出てくると思われる。その都度対処していきたい。

尚、本報告は昭和54年度保母養成協議会研究大会（東京）で発表したものに加筆修正したものである。また「母子福祉研究会」でも報告した。これら二つの研究会では貴重な助言を得た。ここに謝して報告する。

たみあき げん（社会学）

こばやし かつや（社会福祉学）

## EARLY CHILDHOOD EDUCATION AND CARE

### The Study on the Process of Cognition

#### — A Sociological Approach —

Gen TAMIAKI and Katsuya KOBAYASHI

The object of this study is to define the process of acquiring cognition and the nature of this cognition of early childhood education and care (about which the future teachers will hopefully learn in the course of their college education). In studying this process of cognition, a sociological approach will be employed. The students obtain this awareness not only through lectures, seminars and actual training (i.e. student teaching) in college, but also through various activities and experiences outside school. Diversified past experiences of students will also have a great influence on their cognitive development. However, it will be more important and beneficial to study how the given education in college affects the way these future teachers acquire an awareness of early childhood education and care. Since we teachers come into direct contact with them only through lectures, seminars and practical training in school, we must educate them to be better pre-school teachers by giving them a better cognition of early childhood education and care. In this sense, we are responsible for the development of an effective curriculum to achieve this end. In drawing up a curriculum, it is very important to know the students' actual cognitive process and the nature of this awareness. In this respect, this study will play an important role in achieving the aim.

〈調査票〉

「保育」に関する意識調査

(昭54・7)

白梅学園短期大学保育科

Q1 あなたは、なぜ保育科に入学しましたか。その理由を、つぎの中から選んで下さい。  
該当するものはいくつでも○印をつけて下さい。

- イ. 子どもを理解するための知識や技術を習得したい
- ロ. 将来(あるいは現在)自分の子どもを育てるために役立つ知識や技術を習得したい
- ハ. 資格や免許をとって、卒業後すぐに保育者として働きたい
- ニ. 卒業後すぐに保育者として働くつもりはないが、将来に備えて資格や免許をとっておきたい
- ホ. 他大学あるいは他学科を第一志望としたが、入学できなかった
- ヘ. ただなんとなく入学した
- ト. その他(具体的に )

Q2 あなたは、資格や免許をとりたいと思いますか。該当するもの1つを選んで下さい。

- イ. 幼稚園教諭免許だけをとる——右のQS1に答えて下さい
- ロ. 保母資格だけをとる——右のSQ2に答えて下さい
- ハ. 幼稚園教諭免許と保母資格をとる——次頁SQ3に答えて下さい
- ニ. 幼稚園教諭免許と保母資格の両方をとらない——次頁SQ4に答えて下さい
- ホ. まだ分らない(決めていない)——次頁SQ5に答えて下さい

SQ1 イ. 「幼稚園教諭免許だけをとる」と答えた方に

その理由は、つぎのうちどれですか。該当するもの1つを選んで下さい。

- a. 就職先を幼稚園だけに限定している(保母資格はいらない)
- b. 免許と資格の両方をとるためには履習単位が多くなり、自信がない
- c. 将来、幼児教育は幼稚園が中心になると思われる
- d. 保母資格については興味がない
- e. 保育所や収容施設等の児童福祉施設へは就職したくない
- f. ただなんとなく
- g. その他(具体的に )

SQ2 ロ. 「保母資格だけをとる」と答えた方に

その理由は、つぎのうちどれですか。該当するものを1つを選んで下さい。

- a. 就職先を保育所や収容施設等に限定している(幼免はいらない)
- b. 免許と資格の両方をとるためには履習単位が多くなり、自信がない
- c. 将来、幼児教育は保育所が中心になると思われる
- d. 幼稚園教諭免許については興味がない
- e. 幼稚園へは就職したくない



- f. ただなんとなく
- g. その他（具体的に )

S Q 3 ハ. 「幼免と保母資格の両方をとる」と答えた方に

その理由は、つぎのうちどれですか。該当するものを1つ選んで下さい。

- a. 幼免と保母資格の両方をもっていると就職先を幼稚園、保育所などどちらでも決めることができる
- b. せっかく入学したのだから、とれるものは全部とりたい
- c. 将来、保育制度の変更（たとえば保育者としての資格などについて）があっても困らないため
- d. みんなが両方とるため
- e. ただなんとなく
- f. その他（具体的に )

S Q 4 ニ. 「幼免と保母資格の両方ともとらない」と答えた方に

該当するものを1つ選んで下さい。

- a. 免許や資格をとるためには履習単位が多く、自信がない
- b. 卒業後、保育者になるつもりはないので免許も資格もとらない
- c. 短大保育科では、ただ保育についての知識や技術が習得できればよいので、免許も資格もとらない
- d. 卒業後は保育以外の仕事（職業）につきたいので免許も資格もとらない
- e. たとえ免許や資格をもっている、保育者として就職できる見込みがないのでとらない
- f. 卒業後、保育についての仕事はするものであるが、そのばあい免許や資格をとくに必要としない
- g. とくに考える理由はない
- h. その他（具体的に

S Q 5 ホ. 「まだわからない」と答えた方に

その理由は、つぎのうちどれですか。該当するものを1つ選んで下さい。

- a. 幼稚園教諭免許と保母資格のちがいが分らない
- b. 卒業後の進路をまだ決めていない
- c. なぜ、免許や資格が必要なのか分らない
- d. とにかく分らない
- e. その他（具体的に )

Q 3 あなたは、保育科卒業後どのような予定をたてていますか。

該当するものを1つ選んで下さい

- イ. 保育者として働く → 下記 S Q 6 ・ 3 頁 S Q 7 に答えて下さい。

- ロ. 保育者として働かない → 3頁SQ8・SQ9
- ハ. 保育者として働くかどうかはまだ決めていない
- ニ. 卒業後の進路については考えたことがない

SQ6 イ. 「保育者として働く」と答えた方に

- つぎのうちどこで働きたいですか。該当するものを1つ選んで下さい。
- a. 幼稚園→あ. 公立 い. 私立 う. どちらでもよい え. まだ分らない(決めていない)
  - b. 保育所→あ. 公立 い. 私立 う. どちらでもよい え. まだ分らない(決めていない)
  - c. 児童福祉施設(除保育所)→あ. 公立 い. 私立 う. どちらでもよい  
え. まだ分らない(決めていない)
  - d. まだ分らない

SQ7 イ. 「保育者として働く」と答えた方に

- あなたは「保育者として働く」ばあい、どのくらい続けたいと思いますか。  
つぎのうち、該当するものを1つ選んで下さい。
- a. 生涯の仕事として続けたい
  - b. 結婚するまで働きたい
  - c. 子どもが生まれるまで働きたい
  - d. 出産後一時やめて子どもが大きくなったら、また働きたい
  - e. とにかく働いてみて、それから考える
  - f. ほかに適当な仕事(職業)が見つかるまで続ける
  - g. まだ分らない

SQ8 ロ. 「保育者として働かない」と答えた方に

- あなたはどこで働きたいですか。つぎのうち該当するものを1つ選んで下さい。
- a. 保育や教育に関係のある企業
  - b. 保育や教育に関係のない企業
  - c. 官公庁(保育や教育に関係する仕事)
  - d. 官公庁(保育や教育に関係しなくてもよい)
  - e. 小学校やその他の学校の教員
  - f. 保育者以外で、子どもの教育に関する仕事ならなんでもよい
  - g. その他(具体的に )
  - h. 就職しない(とくに仕事をしない)
  - i. まだ分らない(決めていない)

SQ9 ロ. 「保育者として働かない」と答えた方に

あなたはどのようにして「保育者として働かない」のですか、その理由を書いて下さい。

Q 4 あなたは、保育という仕事（職業）についてどう思いますか。

つぎのなかで、あなたの考えに該当する（近い）ものを6つ選んで下さい。

- イ. 専門的な知識や技術をより多く必要とする
- ロ. 経済的（賃金など）には報われないが、社会的使命や期待は大きい
- ハ. 女性にのみ適している
- ニ. 子どもが好きかどうかはあまり関係ない
- ホ. はなやかで誰もがあこがれる
- ヘ. やる気さえあれば専門的な知識や技術は要求されない
- ト. 他の職業に比べて、過分の経済的待遇を受けている
- チ. 男性にも女性と同じように適している
- リ. 肉親に対すると同じような愛情を（保育する）子どもにもつ必要がある
- ヌ. 労働に見合った経済的待遇を受けている
- ル. 地味であり目立たない
- ヲ. 経済的に報われているが社会的意義は小さい
- ワ. 子どもが好きでなければつとまらない
- カ. それほどの専門的知識や技術を必要としない
- ヨ. 経済的にも報われ、社会的使命も大きい
- タ. 現代の日本では女性により適している
- レ. 労働に比して、経済的には十分に報われていない
- ソ. 外観ははなやかであるが、実態は地味である

Q 5 保育者であるためには、どのような条件が必要だと思えますか。

つぎのなかで、あなたの考えに該当するもの（近いもの）を5つ選んで下さい。

- イ. （音楽や造形その他の）専門的技術の習得
- ロ. 安定した情緒や豊かな情操
- ハ. 子どもがただ好きという気持
- ニ. 免許や資格は必ずしも必要でない
- ホ. 激しい労働に耐えうる体力
- ヘ. 子どもをこよなく愛する心
- ト. 社会的一般常識
- チ. 免許や資格は全く必要でない
- リ. 女性であること（保育者は女性でなければならない）
- ヌ. 子どもを深く、正しく理解しようとする態度
- ル. 豊かな個性
- ヲ. できるだけ若いこと
- ワ. 教育学や心理学その他の専門的知識の習得
- カ. 豊かな協調性
- ヨ. 免許や資格は必要

Q 6 あなたは、自分が保育者として適していると思いますか。

該当するもの1つ選んで下さい。

- イ. 非常に適していると思う } 右記 S Q 11 に答えて下さい  
ロ. やや適していると思う }  
ハ. どちらともいえない (分らない) → 下記 S Q 10 に答えて下さい  
ニ. あまり適していないと思う } 右記 S Q 12 に答えて下さい  
ホ. 全く適していないと思う }

S Q 10 ハ. 「どちらともいえない」と答えた方に

その理由を、つぎのうちから1つ選んで下さい

- a. まだ、自分の性格や適性を十分に理解していない  
b. 保育者として必要な能力を十分に習得していない  
c. 保育者であるための必要条件を十分に理解していない  
d. その他 (具体的に )

S Q 11 イ. ロ 「適している」と答えた方に

あなたはどのようにして保育者に「適している」と思いますか。つぎのなかから、その理由を5つ選んで下さい。

- a. 免許や資格がとれる見込みあり  
b. 豊かな協調性がある  
c. 専門的知識を習得している  
d. 若いから  
e. 個性が豊かである  
f. 子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけている  
g. 女性であるから  
h. 社会的一般常識をもっている  
i. 子どもをこよなく愛する心をもっている  
j. 激しい労働に耐える体力をもっている  
k. 子どもがただ好きである  
l. 情緒が安定し情操が豊かである  
m. 専門的技術的を習得している

S Q 12 ニ. ホ 「適していない」と答えた方に

あなたはどのようにして保育者に「適していない」と思いますか。つぎのなかから、その理由を5つ選んで下さい。

- a. 免許や資格がとれる見込みがない  
b. 豊かな協調性がない  
c. 専門的知識を習得していない  
d. 若くないから

- e. 個性が豊かでない
- f. 子どもを深く正しく理解しようとする態度を身につけていない
- g. 女性でないから
- h. 社会的一般常識をもっていない
- i. 子どもをこよなく愛する心をもっていない
- j. 激しい労働に耐える体力をもっていない
- k. 子どもがただ好きでない
- l. 情緒が安定せず情操も豊かでない
- m. 専門的技術を習得していない